

アドルノの否定的弁証法

山 根 共 行

アドルノ（1903—1969）は主著『否定的弁証法』（1966）の序言の冒頭で述べている。「否定的弁証法という表現は伝統にそぐわないだろう。プラトンにおいてすでに、弁証法は否定性という思考手段によってあるなんらかの肯定的ポジティブなものが産み出されることを求めているからだ。後には、否定の否定という図式がこのポジティブなものを簡潔に言い表すようになる。本書は、明確さをないがしろにすることなく、弁証法をこのような肯定的アフィルムマティーフな本性から解放したいと望む。このパラドックスな書名を展開させてゆくことは本書のもつ狙いのひとつである。」(9)

1

この基本的な意図と直接関係するのは「否定の否定を肯定と等置することは同一化作用イデンティフィカツィオーンのもつ本質であり、形式的原理のもっとも純粋な形である」(161)という言明である。アドルノは続けていう。「この形式的原理でもって、弁証法のもっとも内深いところでのマイナスかけるマイナスはプラスという代数法則を認める伝統的論理学という反弁証法的原理が優位にたつ。否定の否定を肯定と等置すること、これはヘーゲルがあれほどまで執拗に対抗心を顕にしていた数学から借用したものだ。」このようにヘーゲル弁証法の中の「反弁証法的原理」を指摘する一方、アドルノは別の箇所では「否定の否定」について次のようにいう。「否定の否定は否定を後戻りさせはしない、それどころか、この否定が十分に否定的ではなかったことを明らかにする。」(162) アドルノは否定の後戻りとしての肯定を拒否する。否定の否定は否定よりさらに徹底したつきすすんだ否定に他ならない、肯定への裏返りは認められない、これがアドルノの強調していることだ。「否定されたものは、それが消滅するまで否定的である。この点でヘーゲルとは決定的に異な

る」「解消されえない非同一なるものの表現である弁証法矛盾、これを再び同一性でもって平らにならすことは、この矛盾のいわんとすることを無視し、純粹論理的思考へと逆戻りすることだ。」(162) アドルノは否定の否定を肯定と等置することはしない。アドルノによれば、否定の否定は否定ということになる。アドルノの否定的弁証法のヘーゲル弁証法に対する批判の第一点は、これまで見てきたように「否定の否定」の理解にかかっている。

筆者は、形式論理学と弁証法の関係を、静止の論理学と運動の論理学との関係として考えている。両者は互いに他を排除しないばかりか、相互に補完しあうものではないだろうか。自然と精神の分野の諸々の運動に内在する論理を対象とする弁証法は、その運動する事物を静止したものとみなす場で成り立つ形式論理学を排除しないばかりか、むしろこれを前提としていると考える。もしこう考えることができるなら、否定の否定を肯定と等置する形式論理学は「反弁証法」的ではなく、「非弁証法」的と呼ぶべき要素である、といえるだろう。ヘーゲルの弁証法の中に「非弁証法」的原理が含まれていても、それ自体は不都合ではない。このように交通整理ができるなら、ヘーゲルの弁証法の有効性を保持しつつ、同時にアドルノの否定性に力点を置いた弁証法の批判的意図も充分考慮できるのではないだろうか。

2

否定の否定の肯定との等置を反弁証法的だとして拒否するアドルノは、肯定ポジティヴィテートをいかに理解しているか。「動揺しない否定は、存在するものの承認に手を貸すことがない、という点で本気になる。」(162) 存在するものの承認、この肯定をアドルノは拒否する。この場合、アドルノの次のようなイデアリスムス批判が背景にある。「否定の否定は肯定である、と主張するのはただ、ポジティヴィテートを総概念性として出発点においてすでに予め仮定する者だけである。この者は、論理のもつ論理の後にくるものに対する優位性のもたらす獲物、この哲学のイデアリスムスのごまかしの獲物、つまり正当化そのものを手に入れる。」そして、この正当化こそ、「形式論理の、ひいては主体性原理の絶対者に向けた投影」に他ならない、という。「奥深い洞察と

その破滅の間をヘーゲルの文章は揺れ動いている」(162)として、アドルノはヘーゲル哲学の特徴的な箇所を引用している。「真理もまた、客体と一致する知として肯定的なものである。しかし、真理は知が他者に対して否定的に振る舞い、客体を貫き、そしてこの客体という否定性を止揚するかぎりにおいて、自己との同等性グライヒハイトであるのだ。」この「自己との同等性」が「ごまかし」だと、アドルノはいう。「真理を知の客体を貫く否定的な振る舞いとして捉えること、つまり、客体を貫き、客体の直接的なあれこれの在り方のもつ仮像を消し去る知として規定することは、『客体と一致する』知としての否定的弁証法の綱領のようにさえ聞こえるのだが、しかし、この知をポジティヴィテートとして定着させることがこの綱領を断念させる。」なぜなら、自己との同等性とは知の自らの同等性に他ならないのであり、結局、客体との一致、一致すべき客体は置き忘れられて、残るのは知の自己同等性となる。アドルノはこれを「抽象的なポジティヴィテート」「純粋な同一性」(162)と呼んでいる。ヘーゲルのいう「止揚」のもつ出発点と到達点の間の質的变化という一面をアドルノは積極的に評価しない。そればかりか、アドルノは主体と客体の弁証法はヘーゲルのイデアリスムスでは、他のイデアリスムスにおけるのと同じ要因により、失敗に終わっている、とみている。客体を充分に取り込めない、主体の哲学。自己同一性を仮定するイデアリスムス。ヘーゲルとアドルノがもっとも接近する場と、にもかかわらず決定的に離れてゆく場とがあたかも重なり合うようにここに集中しているようだ。ポジティヴィテート、この存在するものの承認を徹底的に拒否するアドルノ。アドルノは彼自身に向けられるであろう非難、否定の否定のもつ肯定性を批判することは「ヘーゲルの論理学の生命線を傷つけ、弁証法的運動をまったく認めない」(163)ことになるのではないか、との非難に対し、「弁証法的運動は権威主義的にヘーゲル自身の自己理解の枠に狭く閉じ込められてしまっている」と言い切る。

3

肯定ポジティヴィテートとならんでアドルノの批判するのは同一性イデンティテートである。「実のところ、非同一性こそ同一性の目的であり、同一性に

おいてまだ救い出されるべきものなのだ。伝統的思考の誤りは、同一性を目的としてきたことにある。」(152)「非同一性の認識が弁証法的であるのは、他ならぬ非同一性の認識そのものが、同一性思考とは異なり、またこれ以上に、同一化することにある。」同一性思考とは異なるかたちで非同一性認識は「同一化イデンティフィツォーレン」を行うという。それゆえこの認識は弁証法的である、とアドルノは続けている。これはいったいどういう意味か。「非同一性の認識は、あるものが何であるかを言おうとするが、同一性思考は何かあるものがいったい何に属し、何の実例であり、何を代表しているか、すなわちそれ自身ではない何かを言おうとする。」「こうして同一性思考は、容赦なく対象に迫れば迫るほど対象の同一性から遠く離れてゆく。」「事物がその概念に照応していない、という非難の中にはまた、事物がそうなって欲しいという望みもまた生きている。」「非同一性の意識は同一性をこのようなかたちで含んでいるのである。」(152)

「ごく簡単な同一性判断の中でもすでに、プラグマティックな要素、自然支配の要素にユートピア的要素が寄り集まっている。Aは、まだそうになっていないものであるべきだ。A soll sein, was es noch nicht ist.」(153)「このような希望は矛盾を含みつつ、述語的同一性の形式が破られるようなものに結びつく。これは、哲学の伝統ではイデーという言葉に当たる。」「イデーは孤立したものでもなく、また虚ろな響きでもなく、まさに否定的徴候なのだ。」「すべての獲得された同一性のもつ非真理は真理の逆の姿だ。」獲得された同一性、AはBである、で表現された同一性は、アドルノによると真理ではなく、非真理なのだ。アドルノの同一性批判の原点がここにある。存在するものの承認に手を貸さない「否定的弁証法」は、肯定的同一性判断「AはBである」に満足しない。むしろ「AはBではない」という否定的判断の中に「AはBであるべきだ」とのゾレンを読み取り、ここに变化・運動する事物の矛盾を見出しそうとする。(未完)

テキストは Thodor W. Adorno, Negative Dialektik, Frankfurt am Main 1966, (STW 113) を用いた。括弧内の数字はテキストのページ数を表す。

(本論は、研究補助金による研究成果の一部である。)